

前書の問題

飯 田 正 一

俳諧の問題として、前書というものは、あまり取上げられたことがないように思う。理由はもちろんあるわけだが、根本的には、前書をどのように見るか、ということにかかっている。前書を、発句と同じ次元では考えない、前書と発句を一体として見ない、あるいはそうした意識に乏しい、というようなことなのだろう。作者の側からいっても、前書と発句の関係を、それほど緊密なものと考えなければ、前書はそれだけ固定せず、流動的になる場合もしばしば起る。読者の側からすれば、前者を省いても、発句の理解と鑑賞に妨げないような場合、前書をおろそかにするのも、あるいは当然かも知れない。実際問題として、前書というものは、劃一的に処理することができず、取扱の面倒なものである。

だが、前書を添えるのは、作者としてもそれを必要とするからである。読者が作品を享受する場合、作品そのものに即して考えなければならぬのは、もちろんだ。作者が、必要として添えた前書を、簡単に取扱ったり、軽視したりしていいという理由はない。それを敢えてするのは、作者の意図を無視することであり、作品を正しく理解しようとする所以ではない。時には、作品の評価について、不用意な誤りを犯すことにもなり兼ねないのである。前書の

問題を検討することも、一つの課題として許されていいと思う。

二

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月 芭蕉（『笈の小文』）

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し 同（『猿蓑』）

前者は『笈の小文』旅中の句だが、芭蕉はこのとき明石には泊らず、すぐ須磨に引返している。だのになぜ「明石夜泊」としたのだろう。後者は作句年次を確定し難いが、芭蕉が冬信濃を過ぎた事実はない。だのになぜ「信濃路を過るに」としたのだろう。作者としては、後述するように、特に意図するところがあって、事実には背馳してまでも、こうした前書が必要としたのである。この前書がなければ、作者としては作意を完結し得ないとしたものであり、その意味で、この前書は、他のものをもって代えることのできないものであった。

清滝や波にちり込青松葉 芭蕉（『笈日記』）

この句は、芭蕉が最後の病床にあって、死の数日前、前作「清滝や波に塵なき夏の月」（「大井川浪に塵なしとも」）を改案したもののだが、『其袋』には「嵯峨に簞りて」、『翁草』には「清滝眺望」、『陸奥衝』には「嵯峨に簞し比」、『泊船集』には「清滝」と、それぞれ前書している。ただしいずれも、作者から直接聞き伝えたものではなく、従ってその前書は、作者自身預り知らぬもので、すべて編者の私意に出るものと見られる。これらも前書として、そのまま存置すべきものであろうか。これらを「明石夜泊」・「信濃路を過るに」などと同様に扱うのは、

どうも疑問があるように思われる。

都ちかき所にとしをととりて

薦を着て誰人います花のはる 芭蕉（『其袋』）

この句は、荷兮宛芭蕉書簡（元禄三年一月二日付）に「都のかたをながめて」、万菊丸宛同書簡（同一月十七日付）に「歳旦 京ちかき心」、真蹟草稿に「元禄三元旦 みやこちかきあたりにとしをむかへて」、また『卯辰集』には「湖水のほとりに春をむかへて」、『泊船集』には「京ちかき所に年をととりて」、『蕉翁句集』には「都ちかき所にとしを取て」等としている。言うところの意はおおよそ同じだろうが、形の上では、自筆でも三様になっているし、撰集でもそれぞれ違う。言わば固定化していないのである。芭蕉には、句形にも異同のあるものなど多いが、こうした場合、前書を含めてどれを本位句としたらいいのか。初出の句を本位句とするというのは、あまりにも便宜的過ぎるし、方法として正しいとも言えない。一つの作品は、最終的には一つの形態しか持たない。とすれば、これらの前書は、本文批判の問題としてどう取扱ったらいいのか。原則的な方法で、処理できるのだろうか。

従来、前書の取扱について、具体的な提案をしたものは、ほとんどないようだ。注意するとしても、異同を註する程度に止まり、それ以上に出ることはなかったのではないか。異同に対しては、具体的にどのような判断をするか、というこがなければなるまいし、それが作品批判に繋がる。作品には一つの形態しかない、という意味では、前書にそういう方向を考えてみることも、必要ではないか。「薦を着て」の前書の一つに整理することは、ある種の冒険を伴わずにはできないとしても、「清滝や」の前者をそのままの形で認める必要はあるまいと思う。

三

和歌には、詞書がある。和歌は叙情を中心とするが、和歌のような短詩形が叙情を中心とする限り、作歌の動機や事情を示すものは、当然作品の背後におくことになる。対象を感動の頂点で捉えようとすれば、叙事的方法の入り込む余地はない。そこに詞書を生む根本の要因があった。しかも、個人間の贈答を主とした、言わば褻の歌が、公けの広場で客観性を主張するためには、自然、詞書を必要とすることが多くなる。一首一首完結した形式をもつ和歌が、詞書を必要とするのは、一種の自己矛盾だともいえないが、そこに短詩形のもつ免れ難い宿命がある。そして、詞書が作品の一部として、作品自体の内部構成に参加するとき、詞書ははじめて積極的にその機能を發揮してくるのだ。

詞書は、俳諧では前書という語を用いることが多いようだ。その前書は、俳諧では、和歌の詞書ほど多用されていないが、詞書が、たぶんに形式化して用いられてきたのに対し、一方では、そうした形式化をそのまま踏襲しなかったからであろう。それに、和歌と俳諧（発句）と、発想の上での相違が、またおのずから作用しているのかも知れない。俳諧は、和歌よりも叙事的方法を取ることが多い。それが前書にも影響して、作句の動機や背景を、重ねて説明することを要求する度合いが、少ないのだろう。

四

前書というものを、蕉門ではどのように理解していたか。ここで『去来抄』を引用してみる。

ちる時の心やすさよけし花 越人

其角・許六共曰、此句ハ謂不応故に「別僧」と前書あり。去来曰、けし一体の句として謂応せたり、餞別となして、猶見あり。

句は、『猿蓑』に「別僧 ちるとき心のやすさよ米蓑花」として出る。去来がこの句を問題にしたのは、其角や許六の解に承服し難いものがあつたからである。其角の解は『句兄弟』、許六の解は『篇突』に出るが、共にこの句を單に写実的なものと見ず、従つて句だけでは作意を明らかにし難いので、前書を添えたのだとしている。去来はそれに対し、写実的な面を認めて、芥子の花が脆く散る状態を詠んだものとしても鑑賞にたえろとしたが、同時に、何物にも囚われぬ僧の身の上の象徴とするとき、一層奥深いものがあるとした。去来は、前書の有無によつて二つの意味を想定し、前書があつてはじめて、作者が表現しようとする意味世界の表徴を可能にした、と見たのである。

ところで、去来がこの句を取上げた発端は、実は『篇突』にあつた。

当時の前書を見るに、其句の講尺也、前書と云は其句の光を添る事也。一年、江戸にて晋子が『句兄弟』をあげる時、許六語て云、越人が、けしの句は髓にいひたらず、此けしを返して、兄弟を付したりとて、

ちる時の心やすさよけしの花 越人

散時は風も頼まずけしの花 其角

とせしと云時、許六が云、此越人がけしにて、師の名人をしるといへば、晋子が云如何。答て云、吾子がいへるがごとく、此けし云たらず。故に僧にわかるゝと云前書を付て餞別の句とし、猿蓑のには入給ふ也といへば、晋子うれしがりて句兄弟には書入たり。越人がけしの句は前書し髓光をましたり。是後代、前書の格式たるべし。

『字陀法師』には、このことをさらに具体的に主張する。

題と前書との相違有べし。近年其差別なし。前集『篇突』に此事あれど、かさねて申侍る。前書に二様あるべし。一には発句の光をかゝぐる前書有。二には詞書なくては後代難とすべき時、前書を加へて後のいひわけに残す事あり。

『去来抄』の論は、言わばこの延長線上のものだったのだ。

許六は、題と前書は相違あるべきことを述べたが、この二つの区別は、実は必ずしも明確ではない。そこで許六も、「近年其差別なし」と言わざるを得なかったのだが、その真意はやはり、二つの区別を認めようとするところにあつたらしい。だから別に、「題に縦横の差別有べし。近年大根引のたぐひを、菊・紅葉書ならべ出する覚束なき事也」ともするのである。しかも許六は、「当時の前書を見るに、其句の講尺也」として、そのようなものには前書としての意義を認めまいとした。だから許六の前書とは、発句の前に添えた詞書そのものを汎称するのではなく、極めて限定された、範圍の狭いものとならざるを得なかったのである。その前書とは、要約すると、

- (一) 発句の光をかかげるもの（発句に象徴的意味を添えるもの）
 - (二) 後代難を免れるためのもの（表現を正しく理解させるためのもの）
- の二つとなる。うち(一)については、ただ例句をあげただけで、特に説明は加えていない。

儒士何某がむすこ洛に入て入学すと書く。唐土に櫻樟七年の才と云は鈍にして遅し。當時は三年にて大木の幅する木あり、^(通)由断すべからず。

本シ箱に先ヅなる桐の若芽哉 許六

句は、大きく成長する桐の木を、心に描いてのもので、その意を、前書によって何某が子息の上に移して、祝賀の

意を箴めたのである。そこに「ちる時の」と同じ手法があった。

自然をもって人事の譬喩とし、自然と人事を一体として見る。そうした方法は、古くから存在した。日本人が、美しい風土から自然に学び得た、対象把握の仕方であつた。

春の歌とてよめる

良岑宗貞

花の色は霞にこめて見せずとも香をだに盗め春の山風（『古今集』一）

歌は、霞の立ちこめた花を遠く眺めながら、その美しさを愛でる心で、せめては花の香なりと吹き送れ、と詠えたのである。「盗め」で擬人しているが、言うところの意は、花を深窓に養われる姫君とし、その姫君に会いたいと願つて、せめては手引なりとしてほしい、といったのである。当時の人はこの歌を読んで、眼前に美しい桜の花を思い浮かべながら、あえかな恋心を連想し、そこに魅力を感じたのであろう。

題しらず

よみ人しらず

よそにのみ見てややみなむかづらきや高間の山のみねの白雲（『新古今集』一一）

『和漢朗詠集』に、「雲」の題で出る歌である。白雲のかかる山の峰をゆかしんだ歌であるが、『新古今集』ではこれを、恋歌一の巻頭に据えた。「雲」の歌が、なぜ恋の歌となり得たかといえは、そこに、深窓に養われる近づき難い姫君を恋する意を認めたからである。自然を対象とした歌が、そのまま人事となつており、そこに表現の二重性というものが完全な形で示されている。王朝の歌人たちは、このようなすぐれた象徴的方法を完成したのである。「ちるとき」に「別僧」と前書したのも、言はば、そのような伝統を踏まえての発想であつた。

「此句ハ謂不応」というのは、表現に十分でないものがある、としたのではない。句が対象に即した表現を取っているので、「別僧」の前書がなければ、象徴的方法としては成り立ち得ないことをいつたのである。「よそにの

み」も、恋歌のなかに加えることによって、象徴的方法を完成したが、「ちるとき」も、「別僧」とすることによつて、はじめて同じ趣の句となし得たのである。

(二)については、

甲戌の秋大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、旧里に帰りて盆会をいとなむとて

家はみな杖にしら髪や墓参 翁

を引用、「此句魂祭とは成がたき故に墓参とは申されけり。詞書に盆会をいとなむと出して後難をのがれ結へり」と記している。これは、句だけでは盆会の句とはなし難いので、前書にそのことを出したのである。許六は

弥生の晦日雨ふりける日、藤の花を折て人の許へ遣しける時

ぬれつゝぞしみて折つる年の内に春はいく日もあらじと思へば

を証歌として、「此歌雨もなく藤もなし、よければこそ古今集には出たれ」としているが、その意が奈辺にあったかは、おのずから明らかだろう。

去来は、前書について積極的には発言していない。ただ『旅寝論』に『篇突』のことばを引いて、「又前書の事は許六の云る如く、講尺のごとくならんは、ほ句の光をうしなふに似たり。前書并文章等、蕉門の手筋あり」とする程度だが、去来もまた、講釈のような前書を排し、句と相俟つて、そこに何らか積極的意味を表現するものでなければならぬ、と考えていたようである。

だが、前書というものを、詞書のなかのある特別なものに限定しようとする考え方は、實際問題として無理がある。あるいは曖昧さを残す。「題と前書と相違有べし。近年其差別なし」というなかで、ある特別なものだけを限定しようとするれば、そこから喰み出すものの処理をどうするのか。もつとも形式を主とした取扱が必要だろう。

許六のいう前書とは、当為としての前書を示したのであるが、前書はやはりもっと広汎なものとして、包括的に取扱わなければならないまい。

五

『俳諧七部集』には、連句も含めてどれくらいの前書が用いられているか、簡単に表示してみる。ただし、季題に類するものは含まない。括弧内は各集の総句数（数え方によって若干の差がある）。

『冬の日』 五（六）

『春の日』 一八（六二）

『阿羅野』 一八三（七四五）

『ひさご』 四（五）

『猿蓑』 九九（四二二）

『炭俵』 三三（二四五）

『続猿蓑』 五二（五二四）

前書は、撰者の方針、撰集の体裁等によっても著しく左右されるから、その多寡が特に問題とはなり得ない。『阿羅野』など、題詞またはそれに類するものが著しく多いが、それは『阿羅野』自体の問題ではあっても、前書そのものの問題ではない。いまこれらの前書を対象として、少し考えてみる。

許六は、題と前書と、近年その差別なしとしたが、実際問題として、前書には題詞の範囲のものが少なくない。

待懸

こぬ殿を唐梨高し見おろさん

荷兮（『春の日』）

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寝ぬ夜かな

同（同）

前書の問題

李夫人

魂在何許 香煙引到焚香處

かげろふの抱つけばわがころも哉 越人（『阿羅野』）

これらの句は、どこに発想の契機を求めたのか。言わば、趣向のための趣向を求めたもので、それだけに純粹な詩的感動によるものではない。ただ、こうした傾向の句は、『七部集』の中では、『猿蓑』以下に全く見られないといつてもいいが、それは単に、荷兮や趣人の問題ではあるまい。俳諧に対する考え方の差——俳風の変化というのが、おのずとそうした面にも示されているのだ、として差支なからう。

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉 凡兆（『猿蓑』）

この句は、王荊公の詩句を題にしているが、それは作者の実感を具体的に表現するためのもので、上掲の荷兮や越人の句の場合とは違うようだ。

其角は、『句兄弟』の句合判詞（三十五番）で、題に「縦の題」と「横の題」のあることを述べた。「縦の題」とは、「花 時鳥 月 雪 柳 櫻の折にふれて、詩歌連俳ともに通用の本題」であり、従つて「古詩、古歌の本意をとり連歌の式例を守りて、文章の力をかり、私の詞なく、一句の風流を專一にすべき」ものである。「横の題」とは、「万歳やぶ入の春めく事より初めて、煤払、鬼うつ豆の数くなる俳諧題」で、それだけ「洒落にもいかに、我思ふ事を自由に云とる」べきものである。上掲「待恋」・「閑居増恋」など、いずれも「縦の題」であろう。其角の句についていえば、『句兄弟』三十番、「牛にのる娶御落すな女郎花」は、遍昭の「名にめでて」の歌によりながら、和歌の本意を全く離れたところに、作意があつたのである。

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乗るや大根引

芭蕉（『炭俵』）

これは「横の題」。「大根引」で新しい題材を見つけている。ただし、其角の場合、「縦の題」も「横の題」も、いずれも句境転換の方法として述べているのであるから、そうした句が常に前書を持つとは限らない。

前書には、その発句の詠まれた時処を示すものが多い。

九月十日素堂の亭にて

かくれ家やよめ菜の中に残る菊

嵐雪（『阿羅野』）

これは、和歌連歌以来のもので、歴史的な規定とか、俳風の変化とかに係わりないものである。

作句の時処を示すものは、時によって、時処を示すだけでなしに、それ以上の意味を持つこともある。例えば、上掲「明石夜泊 蛸壺やはかなき夢を夏の月」、「信濃路を過るに 雪ちるや穂屋の薄の刈残し」のような場合だ。芭蕉が、明石に泊らなかつたのに「明石夜泊」としたのは、なぜか。蛸は明石の名産である。『毛吹草』にも「播磨 蛸」とある。作者は、浜辺にいくつも転がっている蛸壺を見たのであろう。句は、そうした事柄が複雑に作用して発想されたに違いない。「雪ちるや」の場合、芭蕉は冬信濃路を過ぎた事実はないが、『更科紀行』の旅では、秋通っている。「穂屋の薄」は、陰暦七月二十七日に行われる諏訪上下両社の御射山祭に、神幸の飯屋を葺く薄。『撰集抄』巻七、「敵有男山伏負中入助事」に「信濃野のほやの薄の雪散りて云々」とあるのを踏まえていることも指摘されているが、そのためにも、「信濃路を過るに」でなければならなかつたのである。だからこれらの前書は作者にとって内的衝動を表現するための唯一の方法として、他の語をもて代置することのできぬ意味を、作品の中に占めているのである。

前書でもっとも多いのは、作句の事情を説明したものであろう。上述の題詞も、時処を示すものも、おおよそに
いえば、すべて作句事情の説明ということになるが、ここではそれを、狭く限定して考える。『篇突』に、「当
時の前書を見るに、其句の講尺也」とするのも、結局は、この作句事情の説明ということに外ならぬ。

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寝に蚊帳を着せ申 如行（『春の日』）

芭蕉翁をわが茅屋にまねきて

もらぬほど今日は時雨よ草の庵 斜嶺（『炭俵』）

いせの斗徒に山家をとはれて

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな 芭蕉（『續猿蓑』）

最後の句は、『笈日記』には、「九月二日 支考はいせの国より斗徒をいざなひて、伊賀の山中におもむく云々」
として出る。支考も同行したのである。それを前書で「いせの斗徒に云々」としたのは、初対面の斗徒に対する挨拶
の意を主としたからであろう。芭蕉の前書には、そのように行き届いた心が見られる。この場合、それは前書以
前の問題であって、前書そのものの問題ではない。

望湖水惜春

行春を近江の人とおしミける 芭蕉（『猿蓑』）

この句は、初案、上五、「行はるや」から「行春を」と変っているが、その過程で、前書も大きく三変した。

(1) 志賀辛崎に舟をうかべて人々春の名残をいひけるに（真蹟懷紙）

(2) 四季折／＼の名残とこゝろにわたりていま湖水のほとりにいたる（同）

(3) 望湖水惜春

(1)は、当日舟行を共にした人々への挨拶の意を含めた対話体の形式、(2)はそうした対話者を意識しない独自の形式を取っているが、それに対して(3)は、個人的な立場を止揚したものとして²いる。作品は、作者の手を離れた瞬間から客観的な存在となる。のみならず、撰集には撰集としての統一性が要求されるから、ここではそうした条件の中で、前書は(3)に定着したと見るべきであろう。問題は、(1)(2)のような散文の形式からなぜ詩的形式に変ったかということであるが、作者の緊張した精神、複雑な心情表出のためには、そうした整備された形式の方が、よりふさわしいと考えられたのであろう。

許六の説く二種の前書については、すでに述べたが、その前書も、作句の動機や背景を言うもので、その限りでは、ここに示したものと何ら変るところはない。ただ許六の前書は、単なる作句事情の説明ではなく、前書と発句との一体化を主張したもので、前書が作品の一部として、内面的に深い係わり合いを持つような場合をいったのである。蕉風の象徴的方法の完成から、こうした方法が特に意識されたのであろう。

のがれたる人の許へ行とて

みかへれば白壁いやし夕がすみ

越人『春の日』

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉

芭蕉『猿蓑』

冬年孫をまうけて

元日やまだ片なりの梅の花

猿蓑『續猿蓑』

六

前書は、作句の動機や背景を示すものであり、発句の意味を完成させるためのものであり、その限りでは、当然作者に属するものである。ところが、撰集の中では、それとは別に、編者が、作者とは何ら係わりない場で、前書を加えることがしばしばある。撰集を編むという作業の中で、撰句とか句の排列とかは、すべて編者の責任に属するわけだが、同時に、全体の趣向とか体裁についても、意を用いることが多い。そうした場合、編者が自分の好みや判断に従って、作品を自由に取扱う。前書や左註を加えることも少なくない。そのことは、上掲「清滝や」についても明らかだが、なお一、二例を示す。

朔日 暮いかに月の氣もなし海の果 荷今（『阿羅野』）

二日 見る人もたしなき月の夕かな 同

三日 何事の見たてにも似ず三日の月 芭蕉

四日 夕月夜あんどんけしてしばしみむ 卜村

五日 何事も見さだめがたや宵の月 一泉

六日 銀川見習ふ比や月のそら 鶴声

七日 能ほどにはなして帰る月夜哉 一髪

これらは、編集の上で編者が趣向したものであり、前書は、すべて編者の加えたものと見られる。芭蕉の句は、「真蹟色紙」・『笈日記』・「知足書留」等では句形にも異同がある。『猿蓑』の「凡右日記」に、

文に云こす

膳所米や早苗のたけに夕涼 半残

書音

一夏入る山さばかりや旅ねずき 魯町

などあるのも、日記の筆者（芭蕉）が註記したものであること、言うまでもない。

このような前書は、仮りに撰集の中でそれなりの意味を持つとしても、一旦撰集を離れば、特別の意味を持たないし、必要もないものである。「凡右日記」の上掲句なども、「凡右日記」という個体の中でこそ意味はあるが、独立した一句一句としては、何の必要もない。このように、編者の加えた前書は、作者のものとは区別しなければならぬ。時によると、前書が、作者のものか編者のものか判別に苦しむことがあるが、そのような場合と雖も、できるだけ慎重に取扱って、判別を誤らならないことが必要だろう。

『冬の日』が、蕉風展開の上で大きな役割を占めていることは、改めて言うまでもない。いま、その前書について考えてみる。

笠は長途の雨にほころび、帯衣はとまり／＼のあらしにもめたり、佗つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂歌の才士、此国にたどりし事を、不図おもひ出て申侍る。

(1) 狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉 芭蕉

おもへども壮年いまだころもを振はず

(2) はつ雪のことしも袴きてかへる 埜水

つえをひく事僅に十歩

(3) つゝみかねて月とり落す霽かな

杜国

なに波津にあし火焼家はすすけたれど

(4) 炭売のをのがつまこそ黒からめ 重五

田家眺望

(5) 霜月や鶴のイタならびあて 荷兮

(1)は、狂句の物狂い、木枯に吹かれてゆくわが旅姿を、物語の主人公竹斎に擬したもので、前書はうらぶれたその姿をわれとあわれんで、名古屋の連衆に対する挨拶としたのである。(2)は、風雅を願いながら、世事に繋がれてままならぬ身を歎く意で、(1)に答えたもの。前書は、すでに註釈書が示すように、杜甫の曲江対酒「吏情更覺滄州遠、老大徒傷未拭衣」に拠ったのであろう。(3)は、月の面を去来する時雨雲のあわただしさで、前書は、そのあわただしさを強調している。(4)は、炭売が真黒になって働いている妻を、いとしむ意で、前書は『万葉集』巻一四(あるいは『拾遺集』一四)の歌をひき、本歌の趣を大きく変えて、そこにおかしみを求めたもの。(5)は、眼前の実景とした。

こうして見ると、『冬の日』五歌仙の発句は、(1)は別として、(2)から(3)、(3)から(4)と、明らかに変化が見られる。(2)と(4)、(3)と(5)はそれぞれ人事詠・自然詠と、対照的な形を取っている。そのことは、それぞれの前書に対比することによって、さらに明瞭になるが、(2)と(4)は、古詩古歌を踏まえたもので、許六のいう「発句の光をかゝぐる前書」であり、其角のいう「縦の題」である。(3)と(5)は、それに対し、ただ軽く添えた形になっている。そしてこれは、偶然の結果によるものではなく、当初から一種の構成を意図したもののように思われる。編者荷兮は、名古屋連衆の中心である。『冬の日』は芭蕉の指導によったとしても、その興行——企劃に当っては、荷兮の関与した面が多かったことと思われる。その荷兮には、趣向を好んだ句が多い。『阿羅野』など、編集の上でも、たぶんに趣向を凝らしている。とすれば、(2)以下の前書に、荷兮の手が加わっているとしても、必ずしも無稽の言とは

断じられまい。少し大胆な推測だが、(2)以下の前書は、荷令によって整理されていると見て差支あるまいと思う。だが、だからといって、これらは表現されたものとしては、決して編者に属するものでない。飽くまでも作者自身のものである形を取っている。

七

以上、前書について極めて概括的に述べたが、これを要約すると、

- A 前書には、発句との結びつきの上で、種々の形態（段階）がある。
- B 前書は、すべて作品の一部として、慎重な用意の下に取扱うべきである。
- C 前書には、作者のもののほか、編者の加えたものがある。
- D 編者の加えたものは、作品としては除外すべきであろう。

ということになる。常識的な見解を一步も出るものではないが、前書についての注意を喚起すれば足りる。

註

一 『校本芭蕉全集』第二卷等。

二 「俳論」尾形佐（日本古典鑑賞講座『俳諧・俳論』）。